

青年の対人回避行動に自己愛の脆弱性 および自己効力感の諸側面が与える影響

博士前期課程 平成28年度修了生 前 和花子

要約

本研究では、現代の青年の対人回避行動に着目し、その行動を引き起こす要因について検討した。対人回避傾向を引き起こす要因として「恥」を想定し、恥の意識を増大させる要因として自己愛の脆弱性と自己効力感を取り上げた。想定される仮説モデルについてパス解析を行い、「自己愛の脆弱性」と対人関係における自己効力感が対人回避行動を促進・抑制する要因となるのかについて検討を行った。その結果、「自己愛の脆弱性」「自己効力感」の一部は、男女ともに一部の対人行動に影響を与えていた。ここから、青年は不安が高まる際に対人関係から退却するのではなく、気を使いながらも人間関係を維持するという結果が示された。今後、本研究では取り扱わなかった循環的な因果関係を視野に入れたさらなる研究が期待される。

キーワード：対人関係、自己愛、自己効力感、青年期

I. 問題と目的

1. 青年期における対人関係と恥の意識

対人回避行動は様々な要因が背景にあると考えられているが、想定される要因の一つに他人からどのように見られているかに関連する「恥の意識」があげられる（岡野，1953）。恥の意識は、私的自己と公的自己との間、または理想自己と現実自己の間にギャップを感じた時に、自尊感情の低下とともに増幅されるものであり、自己愛が過敏であるほどそのギャップを感じやすいという研究がある（岡野，1953）。自己愛が過敏である状態とは、他者からの評価や他人の目に映る自分を意識しやすい状態のことを指す。上地・宮下（2005）は、他者を意識したときに生じる不安や緊張を和らげる力の弱さを自己愛の脆弱性と呼び、過敏で脆弱な自己愛は大なり小なり全ての人に存在するとした。また、中谷（2006）は、自己愛が脆弱な青年は「他者によって自己価値・自己評価が低められるよう

な証拠がないと確認することで、自己評価・自己価値を維持している」と言及しており、自己愛が脆弱である時、自己評価が他者からの評価の影響を受けやすいと明らかにした。さらに、自己愛の研究では性差についても言及されている（Carroll, 1989：高木2006）。中山（2007）は自己愛の脆弱性や過敏性の側面では、女子の方がその性質を強く持つのに対し、誇大性の側面においては、男子の方が高い得点を示すという研究結果を示している。

2. 青年期における対人関係と自己効力感

自己効力感とは「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度上手く行うことが出来るかという個人の確信」（坂野・東條，1993）と定義されるが、大きく分けて、2つの水準が明らかにされている（Bandura, 1977）。1つ目の水準は、領域固有の自己効力感と呼ばれる、特定の場面における行動や意思決定にかかわる自己

効力感である（成田・下中・中里・河合・佐藤・長田，1995）。特定場面对人関係に絞った研究においては，金子・中谷（2014）が友人との葛藤解決効力感の高さは，友人関係の満足度や適応的な行動に影響を及ぼしている可能性を示唆している。さらに新井・広中・近藤（2015）らは対人的自己効力感が高い人ほど，社会場面における不安と対人回避の傾向が低くなると明らかにした。

2つ目の水準は，一般性自己効力感と呼ばれる物事全般に対する効力感であり，日常生活全般の行動決定に影響を及ぼすとされる。坂野・東條（1986）は，同様の概念を一般性セルフエフィカシー（以下GES）と呼び，GESが高い時，出来事に対して積極性を持って取り組める，不安を持たず取り組めるなど行動レベルでの影響について言及した。さらに，三好は，「主観的自己効力感尺度」の研究において，日常全般の出来事に関してどの程度確信を持っているかという認知的な側面で自己効力感を測定することの重要性を指摘した。

さらに，金子・中谷（2014）の研究において，友人との葛藤解決効力感は青年の全般的な自尊感情を高めると示されている。また，岡田（2007）は青年の友人関係のあり方が，個人の社会的適応や精神的健康へ影響するというを明らかにした。ここから，青年にとって，対人の関係を通して得られる効力感，全般的な自己評価に影響すると考えられる。

3. 仮説モデルについて

対人回避傾向の背景にある恥の意識を増幅させる要因には自己愛の脆弱性と自己効力感が関係すると考えられる。したがって，青年の対人回避行動に関しても，自己愛の脆弱性と自己効力感が因果的に関わるのが想定される。この関連について仮説モデルとして図1に示した。

この仮説モデルでは，自己効力感に関しては，青年において対人関係の問題が青年個人の自己効力感や自己評価に影響を与える（岡田，2007）ことから，友人との葛藤解決効力感と全般的自己効力感を設定して両者間の因果関係を想定している。

また，自己愛の脆弱性と自己効力感の間にも因果関係を想定している。自己評価によって形成される自己効力感や自尊感情は，本来の自己を他者から承認・賞賛されることで形成されていくものである。青年が自己を評価し，価値観を形成する上で，他者から承認・賞賛を求めることは必要で健康的な自己愛の働きである。しかし，自己愛が過敏・脆弱である場合，必要以上に他者からの承認や賞賛を求め，その欲求が満たされない時，青年にとってマイナスの影響を持つと考えられる。そこから，自己愛の脆弱性は自己効力感に影響を与える要因になると想定される。よって，自己愛の脆弱性は自己効力感に影響を与え，さらに自己効力感を介して対人回避行動を変化させる要因となると想定される。

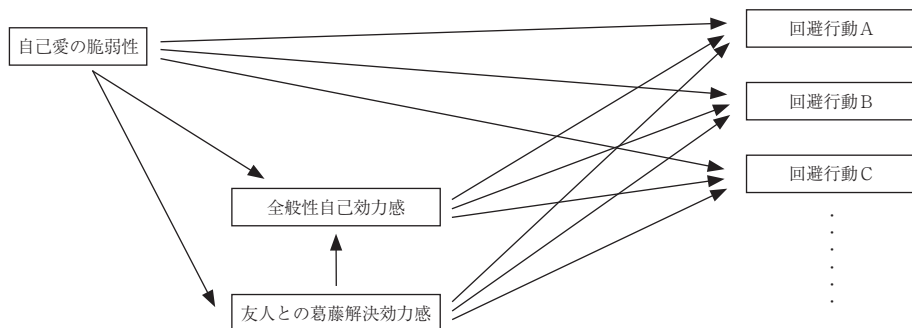


図1. 想定されるモデル

なお、自己効力感と対人回避行動の関係については、このモデルのように一方向の因果関係ではなく、循環的に影響を及ぼし合っている可能性も考えられる。青年期において回避的な対人行動を重ねることは、青年の自己評価に影響を及ぼすことも想定されるということである。この視点に立てば、この仮説モデルとは異なるモデルを想定する必要があるだろう。

4. 本研究の目的

本研究の目的は以下の2つである。

1. 自己愛の脆弱性と回避行動との関係における性差の検証

まだ十分に解明されていないことを踏まえ、性による影響の仕方の違いについて全般に検討する。

2. 仮説モデル・仮説の検証

先行研究の理論に基づき因果関係を想定した前項の仮説モデルをもとに、青年期の対人回避行動に対する自己愛の脆弱性と自己効力感の影響について検討を行う。

特に以下の関係については仮説として設定し、検証を行う。

- (1) 自己愛の脆弱性は青年の対人回避行動を促す原因となる。
- (2) 自己愛の脆弱性は自己効力感を低下させる原因になる。

II. 方法

1. 調査時期・対象者・方法

2016年10月に関西・九州の5大学（国公立5校・私立2校）の大学生・大学院生の男女を対象に質問紙調査を行った。一部の調査は授業時間内を使い、集団法で行った。授業以外での調査は、個別で依頼し同意を得られた人に、郵送もしくは手渡しで配布。後日回収を行った。質問紙を配布したところ、男子学生153名・女子学生169名の18歳～28歳の計322名から回答を得られた。（平均年齢20.5歳 SD=1.37）

2. 質問紙構成

- ①フェイスシート：大学名・年齢・性別を尋ねた。
- ②対人関係についての測定：傷つけ合い回避尺度（岡田2012）を使用した。4因子構造であり、「傷つけられ回避因子」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」の4因子構造で計33項目からなる。「全く当てはまらない」（1点）～「とても当てはまる」（5点）とし、5件法で回答を求めた。逆転項目を処理後全体および因子ごとに合計点を算出する。
- ③自己愛についての測定：自己愛的脆弱性尺度（NVS）短縮版（上地・宮下、2005）を使用した。「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛欲求の過敏性」の4因子構造で計20項目から成る。「まったくない」（1点）～「よくある」（5点）とし、5件法で回答を求めた。逆転項目を処理後、因子ごとに合計得点を算出する。
- ④友人との葛藤解決効力感についての測定：「友人との葛藤解決効力感尺度」金子（2014）を使用した。一因子6項目からなる尺度であり、「非常に当てはまる」（4点）～「全く当てはまらない」（1点）とし、4件法で回答を求めた。逆転項目を処理後、合計点を算出する。
- ⑤一般性自己効力感についての測定
 - i) 行動面に現れる一般性自己効力感の測定：「一般性セルフエフィシー尺度」坂野・東條（1986）を使用した。「行動の積極性」「失敗に対する不安の低さ」「能力の社会的位置づけ」の3因子構造で計16項目からなる。はい・いいえの2件法で回答を求めた。逆転項目を処理した後に、下位因子ごとに得点を合計した。
 - ii) 主観的な自己効力感の測定：「主観的自己効力感尺度」三好（2003）を使用。6項目1因子で構成される尺度であり「全く当てはまらない」（1点）～「当てはまる」（5点）とし、5件法で回答を求めた。先行研究にそって逆転項目を処理した後、合計得点算術した。

本研究では、青年が日常の一般的な場面において、上手く対処できるという確信を行動的な

側面と主観的な側面からその効力感を測定するために、「主観的自己効力感尺度」及び、「一般性セルフエフィカシー尺度」を合計し、「全般的自己効力感」とする。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の因子構成

青年の対人回避行動について捉えるために、傷つけ合い回避尺度（岡田，2012）を使用した。

これらの傷つけ合い回避尺度，33項目について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。因子負荷量.40以下の項目，複数の因子に高い負荷がある項目を削除し，再度因子分析を行った。その結果，岡田が作成したオリジナルと類似した傾向を持つ3因子22項目が抽出された（表1）。第一因子は友達を傷つけることを回避しながら礼儀を持って積極的に関わる特徴を示し「他者配慮」因子と命名した（ $\alpha = .811$ ）。第二因子は人との関係を回避し，距離を取ることで必要以上に自己や他者の内面に

干渉しないという特徴を示し「距離確保」因子と命名した（ $\alpha = .802$ ）。第三因子は，傷つけられることを回避しながら一定の距離を保つという特徴を示し「傷つけられ回避」因子と命名する（ $\alpha = .756$ ）。

さらに「自己愛の脆弱性尺度（NVS）短縮版」について，本来の因子構造を採用するために，原尺度の因子構造を尊重し分析に用いた。また，それぞれの因子ごとに信頼性分析を行ったところ，それぞれ「自己顕示抑制」因子は $\alpha = .807$ ，「自己緩和不全」因子は $\alpha = .867$ ，「潜在的特権意識」因子は $\alpha = .834$ ，「承認賞賛欲求」因子は $\alpha = .836$ となり，一定の信頼性が確認された。さらに，「主観的自己効力感尺度」について，原尺度の因子を用いるために，原尺度の因子構造を採用し分析に用いた。その際に，信頼性分析を行ったところ， $\alpha = .859$ となり信頼性が確認された。さらに「友人との葛藤解決効力感尺度」について，原尺度の因子を用いるために，原尺度の因子構造を採用し分析に用いた。信頼

表1. 傷つけあい回避尺度因子分析結果（N=322）

	因子		
	1	2	3
『他者配慮』因子（$\alpha = .811$）			
友達の気持ちに気を遣う。	.649		
友達の気分を害するようなことを言わないようにする。	.627		.174
友達にやさしくするよう心がける。	.621		
友達を傷つけないようにする。	.617		.164
場の空気を読んで会話する。	.532		.120
いきすぎた冗談をいわないようにする。	.530	.148	.113
友達の気持ちを察するようにする。	.469	-.199	
友達の話をきちんと聞くようにする。	.466		
友達の話をささげらないようにする。	.457	.315	
友達の言うことを否定しないようにする。	.429	.319	.199
自分が悪いと思ったらすぐ謝る。	.421		
『距離確保』因子（$\alpha = .802$）			
自分の内面に踏み込まれないように気を付ける。		.796	.137
自分のプライベートなことには踏み込まれないようにする。	-.100	.754	
自分の内面的なことは話さないようにする。	-.109	.746	
友達の内面に踏み込まないようにする。		.575	
友達と適切な距離を置くようにする。	.132	.434	
『傷つけられ回避』因子（$\alpha = .756$）			
会話の間があかないように気を付ける。			.685
友達からどう見られているか気にする。			.614
友達からつまらない人と思われないように気を付ける。	.182		.604
友達の前で恥をかかないように気を付ける。	.203	.252	.556
友達から馬鹿にされないように気を付ける。		.182	.563
友達と意見が対立しないように気を付ける。	.198	.178	.425

性分析を行ったところ、 $\alpha = .679$ とやや低いながらも信頼性を確認し、本研究ではこれを採用することとした。さらに、一般性セルフエフィカシー尺度について、原尺度の因子を用いるために、本来の因子構造を採用し分析に用いた。その際に、各因子についての信頼性分析を行ったところ、「行動の積極性」で $\alpha = .703$ 、「失敗に対する不安の低さ」で $\alpha = .724$ 、「能力の社会的位置づけ」において $\alpha = .587$ となり、やや低い値もあるが信頼性を確認し、本研究ではこれを採用することにした。

2. 各因子間の関係の検討

①性差の検討

男女差について検討を行うために、すべての尺度について、尺度因子ごとに、性別を要因としたt検定を行った。結果を以下に示す(表2)。

t検定の結果、「他者配慮」因子と「自己顕示抑制」因子、「自己緩和不全」因子、「承認・賞賛欲求の過敏性」因子において男子よりも女子の方が有意に高い得点を示した。さらに、「潜在的特権意識」は女子の方が男子より有意に高い結果を示した。また、「能力の社会的位置づけ」については女子よりも男子の方が有意に高い得点を示す結果となった。

したがって、「傷つけられ回避行動」の「他者配慮」得点とすべての自己愛の脆弱性下位因子において女子の方が高い得点を示す結果となった。これは、自己愛の脆弱性において、先

行研究の結果を支持するものであった。その一方で、能力の社会的位置づけにおいては男子の方が有意に高い得点を示すことが明らかとなった。

②仮説モデル・仮説の検討

青年の「自己愛の脆弱性」と「全般的自己効力感」、「友人との葛藤解決効力感」、および、「傷つけあい回避行動」の因果関係について検討するために、仮説モデルに基づいてパス解析を行った。「傷つけあい回避尺度」を因子分析した結果、青年の対人回避行動は三つに整理された。

解析に用いた変数は4水準に整理された。第一水準は「自己愛の脆弱性」、第二水準は「友人との葛藤解決効力感」、第三水準は「全般的自己効力感」、第四水準は「傷つけあい回避尺度」の各下位因子である「他者配慮」「距離確保」「傷つけられ回避」である。

解析は一括投入方式の重回帰分析によって行い、第二水準である「友人との葛藤解決効力感」を目的変数にして、第一水準の「自己愛の脆弱性」変数を説明変数にする重回帰分析と、第三水準の「全般的自己効力感」を目的変数として第一水準である「自己愛の脆弱性」、第二水準である「友人との葛藤解決効力感」を説明変数にする重回帰分析、最後に第四水準である「傷つけあい回避尺度」の各下位因子それぞれを目的変数とし、第一水準である「自己愛の脆弱性」、

表2. 各因子得点と性別のt検定の結果

	男性			女性		t	
	平均値	SD		平均値	SD		
他者配慮	42.44	5.84	<	44.39	5.37	-3.12	***
距離確保	15.63	4.11		15.00	3.92	1.40	n.s.
傷つけられ回避	19.20	4.65		19.94	4.38	-1.47	n.s.
自己顕示抑制	15.03	4.42	<	16.43	4.39	-2.84	***
自己緩和不全	13.66	4.60	<	16.46	4.61	-5.44	**
潜在的特権意識	13.24	4.08	<	14.11	4.25	-1.87	*
承認・賞賛欲求過敏性	15.07	4.49	<	16.36	4.37	-2.61	**
行動の積極性	9.85	2.04		9.82	2.01	.17	n.s.
失敗に対する不安	6.84	1.64		6.74	1.58	.57	n.s.
能力の社会的位置づけ	6.11	1.34	>	5.81	1.33	2.03	**
主観的自己効力感	18.25	5.22		18.36	4.70	-.20	n.s.
友人との葛藤解決効力感	16.46	2.57		16.44	2.72	.08	n.s.

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

第二水準である「友人との葛藤解決効力感」、第三水準である「全般的自己効力感」を説明変数とする重回帰分析を男女別に行った。はじめに、男子のパス解析結果によるモデル（図2）と相関関係分析表（表3）について以下に示す。

パス解析の結果から男子においては、仮説モデル想定したパスのうち、ほぼすべてのパスで有意な値を示した。「自己愛の脆弱性」から「他者配慮」、「距離確保」、「傷つけられ回避」に対する標準偏回帰係数が有意な値を示し、さらに「全般的自己効力感」と「友人との葛藤解決効力感」に対する標準偏回帰係数も有意な値を示す結果となった。

ここから、男子において「自己愛の脆弱性」は「他者配慮」行動、「距離確保」行動、「傷つけられ回避」行動を促進する要因であると示唆される。さらに、「自己愛の脆弱性」は、「全般的

自己効力感」と「友人との葛藤解決効力感」を低下させる要因であると言える。

さらに、自己効力感が対人回避行動の要因であるかについて検討する。本研究の結果から、「友人との葛藤解決効力感」は、「他者配慮」に対する標準偏回帰係数のみ有意な値を示し、「全般的自己効力感」は、すべての対人回避行動に対する標準偏回帰係数が有意な値を示す結果となった。つまり、「友人との葛藤解決効力感」は、「他者配慮」行動を促進する要因となり、「全般的自己効力感」は「他者配慮」行動と「傷つけられ回避」行動を促進させ、「距離確保」行動を抑制する要因となるということが推察される。

ここから、男子において対人回避行動は、「自己愛の脆弱性」と自己効力感からの直接的な影響と、「自己愛の脆弱性」からの影響を含んだ自己効力感からの影響を受けているということ

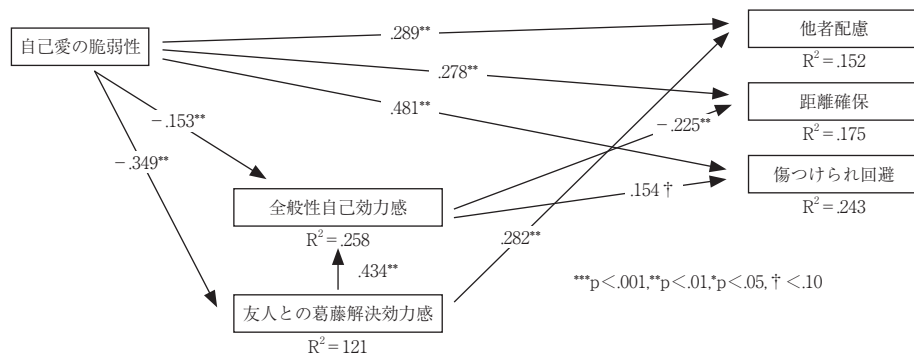


図2. 男性におけるパス図

表3. 男性における相関分割法

		直接効果	間接効果	総効果	相関	見かけの相関
友人との葛藤解決効力感	自己愛の脆弱性	-.349	-	-.349	-.349	.000
全般的自己効力感	友人との葛藤解決効力感	.434	-	.434	.434	.053
	自己愛の脆弱性	-.153	.053	-.100	-.304	-.510
他者配慮	友人との葛藤解決効力感	.282	.074	.356	.264	-.096
	全般的自己効力感	.170	-	.170	.220	.050
	自己愛の脆弱性	.289	-.150	.139	.139	.000
距離確保	友人との葛藤解決効力感	-.022	.098	.076	-.228	-.304
	全般的自己効力感	-.225	-	-.225	-.320	-.545
	自己愛の脆弱性	.278	-.060	.218	.354	.136
傷つけられ回避	友人との葛藤解決効力感	-.113	.067	-.046	-.205	-.159
	全般的自己効力感	.154	-	.154	-.047	-.201
	自己愛の脆弱性	.481	-.001	.480	.473	-.067

が示された。続いて、女子のパス解析によるモデル（図3）と相関関係分析表（表4）を以下に示す。

女子では、「自己愛の脆弱性」からは「傷つけられ回避」に対する標準偏回帰係数のみがある有意な値を示した。さらに、「自己愛の脆弱性」から「全般性自己効力感」および「友人との葛藤解決効力感」に対する標準偏回帰係数は、男子同様どちらに対しても有意な値を示した。これより、女子においては「自己愛の脆弱性」は、直接的に「傷つけられ回避行動」を促進する要因であると示された。さらに、「自己愛の脆弱性」は、「全般性自己効力感」および「友人との葛藤解決効力感」を直接的に低下させる要因になることが示された。

また、「友人との葛藤解決効力感」から傷つけられ回避行動の各下位因子に対して検討を行

う。本研究では、「友人との葛藤解決効力感」は「他者配慮」に対する標準偏回帰係数のみ有意な値を示し、「全般性自己効力感」は、「傷つけられ回避」に対する標準偏回帰係数のみ有意な傾向を示した。ここから、女子において「友人との葛藤解決効力感」は「他者配慮」行動を促進する要因となり、「全般性自己効力感」は「傷つけられ回避」行動を抑制する傾向が示された。

Ⅳ. 考察

1. 性差の検討

対人回避行動、自己愛の脆弱性、自己効力感について性差を検討するために、t検定を行ったところ、対人関係については「他者配慮」、自己愛についてはすべての下位因子において女子のほうが高い値を示した。これは女子の自己愛の脆弱性得点が男子より高くなるという先行

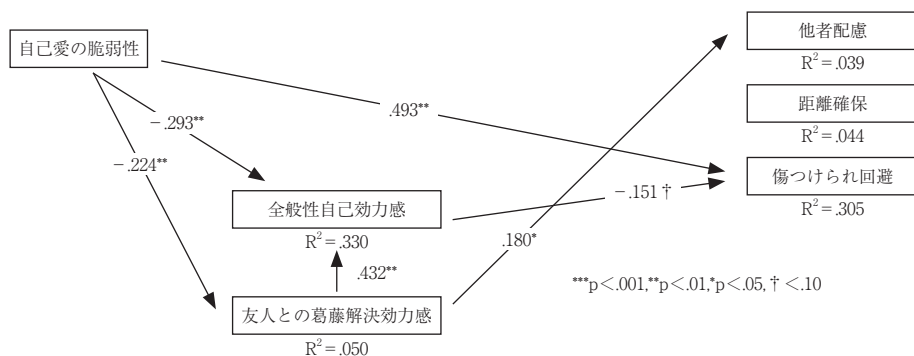


図3. 女性におけるパス図

表4. 女性における相関分割法

		直接効果	間接効果	総効果	相関	見かけの相関
友人との葛藤解決効力感	自己愛の脆弱性	-.224	-	-.224	-.224	.000
	全般性自己効力感	.432	-	.432	.487	.055
全般性自己効力感	友人との葛藤解決効力感	-.293	.100	-.193	-.304	-.697
	自己愛の脆弱性	.180	.019	.370	.184	-.186
他者配慮	友人との葛藤解決効力感	.043	-	.430	.103	.060
	自己愛の脆弱性	.078	.058	.136	.020	-.046
距離確保	友人との葛藤解決効力感	-.124	-.020	-.144	-.170	-.314
	全般性自己効力感	-.046	-	-.046	.498	.045
傷つけられ回避	友人との葛藤解決効力感	.104	.414	.518	-.224	-.190
	自己愛の脆弱性	-.060	-.065	.125	-.126	-.251
	全般性自己効力感	-.151	-	-.151	-.313	-.464
	自己愛の脆弱性	.493	.072	.565	.539	-.026

研究を支持する結果となったといえるだろう。よって、ここから女子は、男子に比べて、自らのうちに生じた不安を感じやすく、他者からの評価に敏感であるということが示された。

加えて、「能力の社会的位置づけ」においてのみ、男子が有意に高い得点を示す結果を示した。「能力の社会的位置づけ」は他者より優れている、社会において貢献できる能力があるといった内容であり、友人との個別関係ではなく、社会の中で自分がどのような立場にいるかということを中心とする内容になっている。この項目について男子が有意に高い得点を示した背景に、男子の性役割意識の存在があげられる。岡本(1995)は青年期の生き方の選択にかかわる大きな要因として性役割を挙げており、一般に男子にとって望ましいとされるイメージとして「指導力がある」「リーダーシップがある」等をあげた。本研究の結果において、青年が社会的な要求を無意識のうちに取り入れ、青年が社会で望まれる男子像を行動としてあらわしている可能性が示唆される結果となった。

2. 仮説モデル・仮説の検証

本研究では、大学生の対人回避行動に影響をおよぼす自己愛の脆弱性の側面と自己効力感の側面についてモデルを立て検討を行った。

①自己愛の脆弱性及び自己効力感と対人回避行動下位因子の因果関係についての検討

i) 対人回避行動の要因となる自己愛の脆弱性について

対人回避行動と自己愛の脆弱性の因果関係を検討した。その結果、男子の自己愛の脆弱性は、すべて対人回避行動の直接的な原因になっていることが明らかとなった。また女子において、自己愛の脆弱性は「傷つけられ回避行動」を促進する直接的な要因となっていると示された。これは仮説(1)を支持するものであった。男子の対人回避行動の背景には、生じた不安を緩和する力の弱さや他者の評価に敏感であるなど、自己愛の脆弱性の諸側面が存在していると考え

られる。さらに、女子においては自己愛の脆弱さは、自己防衛的な「傷つけられ回避行動」に対してのみ直接的な影響を与えていた。松井・中村(2001)が指摘するように、友人に共感し援助することが当たり前とされる女子においては、集団から外れる「距離確保」行動はより一層の恥や傷つきを喚起すると考えられる。自己愛が脆弱で不安や緊張を感じやすい女子は、自己愛が刺激されると、自らの傷つきを避ける為に、自己防衛的な対人回避行動が促進されると考えられる。よって女子青年は、不安や恥を感じながらも対人関係から回避するのではなく、傷つけられないように気を使いながら一定の距離を保とうとする対人行動が促進されると考えられる。

ii) 対人回避行動の要因としての自己効力感について

対人回避行動の要因と想定される自己効力感について検討した結果、「友人との葛藤解決効力感」は男女ともに「他者配慮行動」を促進する原因となることが示された。ここから、対人葛藤を解決できるという確信は、男女ともに他者に対して気を配りながらも積極的な関係を求める行動を促進する要因であると示された。これは青年が自己評価・自己価値を維持する際に、他者によって自己価値・自己評価が低められるような証拠がないと確認するという指摘の表れとも考えられ、友人とうまくやれているという具体的な実感は他者配慮行動を促進する。

また、「全般性自己効力感」は男子の「他者配慮」行動と「傷つけられ回避」行動を促進する要因となり、さらに「距離確保」行動を抑制する要因であるということが明らかとなった。男子において「全般性自己効力感」であらわされる日常の物事に対処できるという自信は、対人行動における恐れや恥の意識を感じにくくさせる、もしくは恐れや恥の意識を感じても、自らでその情動をコントロールする役割をもつ可能性が示唆された。その一方で、女子では、日常の物事に対処できるという自信は、「傷つけ

られ回避」行動のみを抑制する要因となり、対人関係から退却する行動や積極的な行動への影響は見られなかった。傷つけられないように気を遣いながら関係を維持する対人行動は、集団の中で、自己主張することなく調和を重視した無難な行動であると考えられる。松井・中村(2001)の指摘のように共感し援助する調和が求められる傾向がある女子においては、個人としての自信は必ずしも対人関係を促進させるものではないといえるだろう。さらに、この慎重な対人行動の背景に、前述した自己愛の脆弱性得点の高さも影響していると考えられ、不安を感じやすいが為に、より対人関係において慎重な行動を取るのではないだろうか。

さらに、両自己効力感を低下させる要因として自己愛の脆弱性が存在していることが明らかとなった。これは仮説(2)を支持するものであった。ここから、自己愛の脆弱さは青年の自己効力感に影響を与えているという結果が示され、さらに自己愛は自己効力感を介して対人回避行動に影響を与える原因になると考えられる。以上より、「自己愛の脆弱性」及び自己効力感は直接的または間接的に対人回避行動の原因となっていることが明らかとなった。

V. 総合考察

本研究で自己愛の脆弱性や自己効力感からの影響がみられた「他者配慮行動」や「傷つけられ回避行動」は青年が気を使いながらも、友人関係から退却することなく関係の中に留まるものであった。これらは、現代青年の対人関係はかつての対人関係よりは希薄ではあるが、現代青年が一定の対人関係の中に身を置いているといえるだろう。ここから、青年は生じた不安を和らげ個を安定させるために、人間関係から退却することを志向するのではなく、適応的な人間関係である「他者配慮行動」や「傷つけられ回避行動」をとる傾向にある。また、これは先行研究によって指摘されている希薄化した「優しい関係」の様相を捉えたものであると考えられる。「優しい関係」を志向する青年たちにとっ

て、友人との葛藤を生じさせないように、気を遣う関係を形成することは適応状態であると同時に、自らにとっても、恥体験をする恐れがないやさしい関係だといえる。「優しい関係」が当たり前となった青年の現実においては、「優しい関係」から外れ、誰かを傷つけること、ぶつかることも、個が際立つ場面となる。そのため、青年は対人葛藤が生じるような場面をより一層回避し、他者配慮的な関係の中で対人関係を維持していると思われる。

青年の自己効力感がもたらす現実的な認知傾向と自己愛が関わる本来的な欲求という二つの水準で対人回避傾向に与える影響を同時に捉えることはこれまでの研究では見当たらず、本研究は、対人関係において悩む青年や回避傾向をとる青年を支援する際に、その背景にある認知や欲求を想定した援助的な関わりを行う際の一つの示唆となるのではないだろうか。

また、対人回避行動に影響をあたえる要因を明らかにすることを目的として因果関係を想定した。しかし、その因果関係は一方的ではなく、適応的な人間観関係青年の自己効力感を高めるという循環的な影響も考えられ、青年の対人回避行動の様相をとらえるには不十分であったと考えられる。一方的な因果関係を想定し検討したことで、対人回避行動が恥の意識によって変化することが示唆されたが、回避的な行動の積み重ねは青年の自己効力感に影響を及ぼすと思われる。しかし、本研究で示されたように、青年にとって回避的な対人行動は必ずしも不適応的な行動であるとは言い切れない。回避行動が青年の自己効力感にどのような影響を及ぼすかについて現段階では明らかではなく、今後の研究の一つの課題であるといえる。

引用文献

- 新井博達・広中由麻・近藤清美(2015)．社交不安症状と対人的自己効力感が大学生のひきこもり親和性に与える影響 パーソナリティ研究．24, 1-14.
Bandura, A. (1977a). Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change.

- Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A. (1977b). Social learning theory. New York: Prentice-Hall, (原野 広太郎 (監訳) (1979). 社会的学習理論—人間理解と教育の基礎— 金子書房).
- Bandura, A. (Ed.), (1997). Self-efficacy in changing societies. New York : *Cambridge University Press* (本明寛・野口京子 (監訳) (1995). 激動社会の中の自己効力 東京：金子書房.)
- Blos, P. (1962). On adolescence : A psychoanalytic interpretation New York: Free Press.
- Coleman, J. C (1980). Friendship and the peer group in adolescence. In J.Anderson (Ed.), *Handbook of adolescence psychology*. New York: *Jphn Wiley & Sons*. pp.409-431.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, pp.180-191.
- 金子功一・中谷素之 (2014). 青年期の友人関係が適応に及ぼす影響について：友人に対する価値観と葛藤 解決効力感に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 61, 95-103.
- 栗原彬 (1996). やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェス 増補新版 新曜社
- 松並知子・中村晃 (2001). 友人関係における性差 日本心理学 学会第65回大会発表論文集, 959.
- 三好昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (MSGSE) の開発 発達心理学研究, 14 (2), 172-179.
- 成田健一・下中順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討. 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 中谷留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 中山留美子 (2007). 児童期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程 —自己愛における評価過敏性誇大性の関係の変化から— パーソナリティ研究, 15 (2), 195-204.
- 岡田努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 岡田努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成：傷つけあうことを回避する傾向を中心として 金沢大学人間科学系研究紀要, 4, 19-34.
- 小平英志・小塩真司 (2005). 自己愛傾向と理想自己——理想自己の記述に注目して 人文学部研究論集 (中部大学), 13, 37-54.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小塩真司・川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学：概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房
- 千石保 (1985). 現代若者論—ポストモラトリウムへの模索 弘文堂
- 土井隆義 (2008). 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-2.